

本年度の重点目標

- (1)生徒が安心して学べる学校・学年・学級づくり
- (2)違いを認め尊重しあう、いじめを生まない心の醸成
- (3)中高一貫の強みを生かした学習活動、特別活動等の充実
- (4)コンピテンシーベースのカリキュラム構築とカリキュラムマップの開発・活用
- (5)探究推進プロジェクトの推進
- (6)授業づくりプロジェクトの推進
- (7)生きづらさを抱えた生徒への支援の充実

自己評価結果に対する学校関係者評価

A 達成している B おおそ達成している C あまり達成していない D 達成していない

評価分野	評価項目	自己評価		自己評価の適切さ	改善策の適切さ
		自己評価結果	改善の方策		
学習指導	① 個別最適な学びの支援	A	課題を抱える生徒、特に不登校生徒への学習支援策として、同時双方型遠隔授業を実施した。今後は、よりきめ細やかな支援を行うために、学年や保健環境部・保健室・SC等との連携をさらに密にし、アセスメントに基づいた適切な支援の充実を図る。	A	A
	② 生徒の学ぶ意欲を引き出すための授業改善	B	生徒による授業評価を年2回(6月・12月)実施した。評価は、数値によるものと自由記述によるものとした。今後は、教員個人による分析・改善にとどまらず、ワークショップを開催する等して学校全体で共有し組織として授業改善が図られるような校内体制を構築する。	B	A
学校関係者評価委員会における意見		①不登校生徒など課題を抱える生徒への支援について適切に取り組んでおり、特に遠隔授業の導入は有効だと思う。今後の継続指導に期待している。また、可能な範囲で一般の生徒にも部分的にでも導入できると良い。②生徒による授業評価は良い取り組みだと感じる。「一方的に教える」から新たな変化に繋がることに大いに期待する。生徒の評価を授業に活かすのは難しそうだが、授業評価自体はあっても良いと思う。			
生徒指導	① 行きたくなる学校づくり	B	生徒会活動や学校行事に主体的に取り組むとともに、校則について議論する場を設け、自分たちの学校は自分たちで創るという意識の醸成を図った。今後は、生徒が主体的に活躍できる場をより多くし、誰もが行きたくなる学校づくりを目指す。	B	A
	② 教育相談の充実	A	月1回のいじめアンケートや長期休業明けのストレスチェック、並びに年2回の二者面談等から、生徒の心身の状態を的確に把握し、生徒が適時に相談できる体制づくりに努めた。今後は、定期相談にとどまらず、生徒がいつでも相談しやすい環境を整える。	A	A
学校関係者評価委員会における意見		①生徒主体で学校を創っていこうという意識は、難しいが良いと思う。具体案はないが、主体性を伸ばせるような仕掛けがもう少しあると良いと思う。主体性に関して、生徒が校則について議論する場を設ける。学年を超えた仲間たちと考えてほしい。校則という身近な議論をすることにより、校則がなぜあるのか、どのように学校生活を送るべきなのかについても考えられる機会になり、良い取り組みだと思う。②気軽に相談できる環境づくりは難しそうだが、主体性発揮の面で意義深いと思う。			
進路指導	① 進路指導について	B	外部講師を招き、学力推移調査の結果について生徒向けの分析会を実施した。生徒自らが、結果について興味をもち、弱点克服や希望進路達成のための足かがりとすることができた。今後は、より詳細に分析できるような力を身に付けさせたい。	B	A
	② 進路目標達成に向けて	A	総合的な学習の時間で、大学の学部・学科調べやドリームマップの作成等を行い、高校卒業後の将来についての探究学習を行った。今後は、生徒が自らの適性等を踏まえ、必要な情報を主体的に得ることができるような仕掛けを構築する。	A	A
学校関係者評価委員会における意見		①学力推移調査の分析会や探究学習は、進路への意識向上に役立つと思う。その意識が、より主体的な進路選択に繋がっていくと良いと思う。まずはSSHと連携した探究学習の拡充で、進路への意識向上をさらに高めることが重要だと思う。中高の交流等を通じて、主体的に情報を収集する意識を向上させるのも良いと思う。②自らが積極的に将来に向かっていくための必要なスキルが身に付く素晴らしい取り組みだと感じる。きめ細かな指導が継続され、自己の進路選択に結びついている。			
中高一貫教育	① 授業づくりプロジェクトの推進	B	6年間の中高一貫教育を通して、「気づき」「問い」「確かめ」をテーマに、各教科や総合的な学習の時間の中で、探究的な学びに重点を置いた授業づくりを推進した。今後は、より多くの場面で探究的な学びを取り入れられるよう、プロジェクトを強化する。	B	B
	② SSHを通じた中高の連携について	B	中学3年生と高校1年生が合同で実施する大崎耕土フィールドワークをはじめ、SSHに係る発表や研修の様々な場面で、中高が関わり合う機会を設けた。今後は、中高が関わり合う中にも系統性をもった学習指導ができるような体制を確立する。	B	A
学校関係者評価委員会における意見		探究の推進やSSHとの連携は、中高一貫教育の強みを生かしていて良いと思う。中高を繋いだ学習に繋がっていくとさらに良さそう。6年間というのは中高一貫の最大の強みであることから、今後も積極的に取り組んでほしい。また、中学生と高校生とが関わり合える学びの機会は、探究心を深めて、成長につながっている。			

次年度の課題と改善方策

次年度の課題	改善方策
① 生徒指導	生徒の心身の状態を把握するための方策について更なる充実を図る。具体的には、いじめを把握することに限定せず、学校生活に関するアンケート及びストレスチェックアンケートの実施、二者面談期間の延長による相談活動の深化を図る。また、生徒会活動や学校行事において、生徒が主体的に活躍するための場面づくりを行うとともに、教員の意識改革も進める。生徒が校則について議論する場を設けるなど、教員主導から生徒主体の学校づくりへと変わっていくことで、生徒の自己有能感の向上を図り、学校が行きたくなる場所になることを目指す。
② 学習指導	不登校生徒(学校に登校していない生徒)への学習支援の充実を図る。同時双方向型遠隔授業(リモート授業)は一つの手段として捉え、他の手段も視野に入れながら、生徒のアセスメントに基づいた適切な支援策を講じる。また、学習支援を行う期間や、学習の到達目標を明確にし、生徒や保護者との合意形成を図りながら、支援の効果や学習の目標に到達した姿を生徒自身が具体的にイメージしやすいよう、支援計画を策定する。
③ 中高一貫教育	「気づき」「問い」「確かめ」をテーマに、各教科や総合的な学習の時間の中で、探究的な学びに重点を置いた授業づくりをさらに進める。特に、中学3年の探究JrⅢでは、高校1年生と合同で行うフィールドワークについて、行き先は同じだが異なるテーマで調査をさせたり、異なる視点から同じテーマを考えさせたりする等、学習内容に軽重をつけるなどの工夫を施す。

教育長 殿

宮城県古川黎明高等学校
校長 吉 田 信 哉 印

本年度の重点目標

(1)生徒が安心して学べる学校・学年・学級づくり
(2)違いを認め尊重しあう、いじめを生まない心の醸成
(3)中高一貫の強みを生かした学習活動、特別活動等の充実
(4)コンピテンシーベースのカリキュラム構築とカリキュラムマップの開発・活用
(5)探究推進プロジェクトの推進
(6)授業づくりプロジェクトの推進
(7)生きづらさを抱えた生徒への支援の充実

A 達成している B おおそ達成している C あまり達成していない D 達成していない

評価分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		自己評価結果	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
学習指導	① 安定した授業進行の支援	B	授業時数の確保については、実施時数割合等の分析を行い、時数確保を全体の課題として明確化し共有した。具体策としては授業カットから短縮授業への変更と、次年度に向けて第3学年は1、2月の実施時数の見直しを行う。また同時に行事の精選を進めながら、時数の確保に取り組んでいきたい。	B	B
	② ICT機器を効果的に活用した個別最適な学びへの支援と課題を抱えた生徒への学習支援	B	授業評価について、6月・11月の2回実施し、可能な限り年度内に改善を図ることを継続していく。課題を抱えた生徒への対応として、今年度は同時双方向型遠隔授業を実施していく中で対面授業に戻る生徒も出てきている。そのような生徒に対してのアプローチを学年や保健環境部・保健室、図書・IT部との連携を密にしながら、生徒が良い方向に進むための支援体制づくりを推進していきたい。	B	A
学校関係者評価委員会における意見		①授業時数の確保の具体策があつて、ICTを活用した学びの推進も評価できる。②課題を抱える生徒への支援について、適切に取り組んでおり、今後の継続指導に期待している。すべての生徒に対面が最適とまでは思わないが、対面に戻る生徒がいるということは良いことだと思う。ICTを活用した個別最適な学びのうち、一般生徒にも手間をかけずに広げられる部分は広げて、より効果的な学習環境を整備することで、生徒の理解度向上を図れるのではないと思う。			
生徒指導	① 生徒の決断力・実行力・自己肯定感の養成と支援	B	全校生徒の一人一人が自治的な組織である「生徒会」の一員であるという意識を持つことができるように支援する体制を構築したい。よりよい学校生活を送るために自治的な組織を形成して、話し合い、互いの意見や経験を尊重し合えることができるように支援する。	B	A
	② 生徒の社会性や学校としての連帯感の育成と支援	B	中学校・高校の生徒が、中高や学年を超えて互いに協力し、多様な人たちと関わる中で社会性を養わせ、体験的な活動である学校行事を主体的に、企画し、運営することができるように支援する。	B	B
学校関係者評価委員会における意見		①現代において、生徒の自主性を支援するという方向性は良いと思う。具体策ではないが、特別活動以外の日常的な場面でも自主性を高められると良いと思う。生徒会活動の意義を全員が理解するのは重要だが、仕掛けが必要な気がする。②中学校と高校の交流は有意義だと思う。SSH事業だけではなく、中高の生徒が関わる活動(生徒会等)の充実が期待される。多様な人たちと関わらせ、社会性を育み、豊かな人生につながる支援を期待する。			
進路指導	① 進路目標の明確化に向けた中高各段階における適切な指導の推進	B	中学校・高校の教員同士による普段からのコミュニケーションを大切にし、中高連携して進路行事を充実させる。具体的には高校教員から中学生への進路講話を更に充実させるなど、中学生に対する早期指導を進めていく。また、土曜塾や課外講習についてアンケートの調査結果をもとに、各取組を分析・検証・改善しながら講習を企画・立案・運営する。	B	A
	② 適切な進路情報の提供	B	進路行事やキャリア教育を実施した後、本校ホームページやeメッセージを活用して、本校の指導内容を発信していく。また、大学進学だけでなく、専門学校・各種学校や就職志望者に対するガイダンスや情報提供も充実させる。	B	A
学校関係者評価委員会における意見		①きめ細かな指導が継続され、自己の進路選択に結びついている。また、中学からの進路指導の早期化は一定の効果があると思う。情報や選択肢の揭示は重要だが、生徒側の意欲向上の支援も充実させると良さそうである。			
SSH事業	① SSH事業を活用した校内研究体制の構築	B	「授業づくりプロジェクト」と「探究推進プロジェクト」を通じた研究開発に全校で取り組み、全職員が授業プランや探究活動の記録を共有することができた。今後研究開発を継続しながら、指導実践や生徒の変容の記録等の成果物を蓄積・検証し、改善していきたい。また、ルーブリックの作成など、成果物についての校内でのさらなる共有と外部への発信・成果普及に努めたい。	A	A
	② 地域に根ざした課題研究・併設型中高一貫校の特色を生かした探究活動の推進	A	中学3年生・高校1年生合同の「大崎耕士フィールドワーク」による異年齢集団での学び合いや、高校1年生の探究活動における内進生と外進生の編成による学び合いを通じて、併設型中高一貫校の特色を生かした探究活動が展開できた。今後はさらなる学習意欲向上に向けた取組に努め、生徒の変容の記録を蓄積・検証・可視化することにより、さらなる改善につけていきたい。	A	A
学校関係者評価委員会における意見		②特色のある探究活動により、高度な探究力を身に付けさせる取組が積極的に進められているので、さらに強化すると良いと思う。問題点を整理し、改善に取り組むことを期待する。また、探究活動が通常の学習に繋がってくることに良いと思う。「大崎耕士フィールドワーク」探究活動において、異学年での学びを深めてほしい。まずは生徒の取り組みの記録に始まるものだと思うが、生徒の学習効果がより明確に可視化できると次に繋げるアピールになると思う。			

次年度の課題と改善方策

次年度の課題	改善方策
① 学習指導について	今年度は、SSH事業の「授業づくりプロジェクト」において、「気づき」→「問い」→「確かめ」という「黎明探究ループ」を核とした授業づくりを全教員で推進し、互見授業や公開授業研究会等の研修会も実施した。さらに本プロジェクトでは、①探究的な学び②中高一貫教育③学習観点別評価④ICT教育などの班に分かれ、中高合同で多角的な視点から組織的継続的に研究ができる体制が整った。次年度は、そうした個々の研究実践の基盤に立って研究全体を有機的に結び付け、「深い学び」のための生徒の資質・能力の向上に結び付けていきたい。また、課題を抱えた生徒への学習支援については、同時双方向型遠隔授業等による支援が奏功し、学校や教室に少しづつ戻ることができるようになったという事例も見られた。今年度の取組の総括を学校全体で共有し、次年度はさらに個々の生徒の状況に適した、スムーズで実効性のあるものにする。
② SSH事業について	「探究推進」「授業づくり」の2つのプロジェクトが始動し、中学校・高校6年間のコンピテンシーベースのカリキュラム・マネジメント開発について組織的に取り組める体制ができた。次年度は、2つのプロジェクトのそれぞれで得た知見・成果を全体で共有しながら、相乗効果が上がるように研究を推進する。また、「大崎耕士課題研究」における中高合同フィールドワークなど、探究活動における個々の取組をさらに中高で系統性のあるものにしていきたい。近年、高校3年生における総合型選抜入試の面接・小論文などで、探究活動について触れる生徒が多く見られるようになったことも踏まえ、中高6年間の中での系統性をより意識しながら、本事業における様々な取組を推進する。
③ 生徒指導について	学校行事等においては、コロナ禍で途絶えていた中高連携の体制がほぼ回復し、体育祭や文化祭などの実行委員会活動なども中高合同で行えるようになってきた。今後は、中高や学年を跨いだ形での行事・生徒会活動をさらに推進し、多様な社会、異年齢集団の中で他の個性や差異を尊重し、協力・共生していく姿勢と能力の育成に努めたい。その上で、生徒自身が自主的かつ実践的に課題解決に取り組むことができるように教員側は支援する役割に徹したい。生徒達が新たな感覚・視点で行事の企画・立案・運営に取り組むことで、自主性と社会性、チャレンジ精神を養成し、国内外における様々な社会的課題・変化に応えられるような力を養成できるよう支援していきたいと考える。